

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 8 日現在

機関番号：33704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520032

研究課題名(和文) 責任論の起源と展開 - 他者論の宗教的基盤の探求 -

研究課題名(英文) The Origin and Development of Responsibility : The search for the religious basis of the theory of the other

研究代表者

吉永 和加 (Yoshinaga, Waka)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授

研究者番号：20293996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：三カ年計画の課題研究「責任論の起源と展開 - 他者論の宗教的基盤の探求」について、まず2012年度に「他性と否定神学的叙述」として、レヴィナスとデリダの言語論を架橋しつつ、絶対的他者を語る際の否定神学的叙述の可能性を探った。2013年度は、「『悲劇的世界観』と責任論」と題して、彼らの議論をゴールドマンの言う「悲劇的世界観」という概念を用いてパスカルに架橋して、責任論の宗教的基盤を検討する素地を作った。2014年度には、「責任と原罪意識」について、レヴィナスやデリダの法外な「責任」概念が、いかなる宗教的な地歩から導出されるのかを、パスカル、カントの宗教論、特に原罪意識と結びつけて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Over the course of three years, I carried out research on "The Origin and Development of Responsibility : The search for the religious basis of the theory of the other." In 2012, I considered the topic of "otherness and negative theological discourse," investigating the implications of this discourse in relation to the "absolute other" by connecting the linguistic philosophies of Levinas and Derrida. In 2013, I examined "the tragic view" and "the theory of responsibility." Since the absolute other of Levinas and Derrida may be similar to God, I laid the groundwork for a consideration of the religious foundation of the theory of responsibility by concluding their arguments with Pascal observations, as seen through Goldmann's concept of "the tragic view." In 2014, I revealed the religious position that led to Levinas and Derrida's concepts of responsibility, by referring to Pascal and Kant's theories of religion, especially those pertaining to the consciousness of original sin.

研究分野：哲学

キーワード：他者 他者性 責任 レヴィナス デリダ 隠れたる神

## 1. 研究開始当初の背景

(1) フッサールが提起した他者経験の問題は、自己の「自己性」と、自己と他者との「共同性」がいかにして両立するか、に帰着する。このアポリアを克服する有力な議論の一つが、シェーラーやアンリによって提起される情感性に基づく共同体論である。だが、そうした議論は、他者の他者性を喪失させる危険を孕む。そこで、自己と他者が隔絶したものであることを前提しつつ、自己と他者を結びつける「責任」に着目し、レヴィナス、デリダの議論を探究してきた。

(2) しかし、「責任」の議論には二つの問題が指摘される。一つは、その到来によって自己を自己をたらしめる他者が神に近似のものとなること、すなわち他者の絶対化という問題である。もう一つは、自己に課される法外な「責任」の前提とされる、自己の「罪悪感情」の根拠がどこにあるのか、という問題である。これらは、他者論がいかなる宗教的基盤をもつのか、という問題に収斂する。それゆえ、こうした「他者」の形而上学化と「責任」の神学的な在り方について、言語論と宗教論の両面から検討することが課題とされた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、他者論の形而上学化が何故起こるのか、また絶対的他者を言語によっていかに語りうるのかを明らかにすることである。他者論は、西洋哲学の伝統的な形而上学を脱却することを目指して提起された。それにも拘わらず、他者

の他者性が強調される過程で、他者は神に近似のものとなり、他者論は再び形而上学に落ち込むように見える。こうした形而上学回帰は何故起こるのか。その原因を言語の働きに見定め、他者と責任の問題を論じたレヴィナス、デリダにおける言語論を検討する。

(2) 本研究の第二の目的は、(1)を踏まえて、絶対的な他者に即して出来する法外な責任が、いかなる理路で導かれうるのかを明らかにすることである。そのことを、責任概念に必ず伴われる罪悪感情を、キリスト教における原罪意識にまで遡って探究し、現在の責任論が前提としている宗教的基盤を詳らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 第一の目的のために、まずデリダの言語論を『声と現象』において検討し、次いで三部作『コーラ』『パッション』『名を救う』において否定神学的叙述がロゴスを超えて何を表現しうるのかを考究した。さらに、レヴィナスの『観念に到来する神について』とデリダの上記の議論とを比較して、両者がさまざまな類似点を持ちながらも、何故、否定神学的叙述についての是非をめぐって正反対の結論に至るのかを探り、言語の使用が他者論の形而上学化を招く原因を明らかにした。

(2) 第二の目的のために、まずゴールドマンが『隠れたる神』で、パスカルとカントという一見、無関係な哲学者を結びつけた「悲劇的世界観」を吟味し、それがレヴィナス

やデリダの問題構制にも該当することを示した。その上で、レヴィナスやデリダが前提する宗教的基盤をパスカルとカントの宗教論、とりわけ原罪意識に焦点を当てて、罪責感情がいかなる理路で法外な責任論へと帰着しうるのかを考究した。

#### 4. 研究成果

(1) 他者の議論が何故、神を經由せざるをえず、最終的に形而上学的なものに帰着するのか、さらに他者は何故、否定神学的叙述によって語られうるのか、について、デリダの言語と「名」に関する議論を検討した。そこから明らかになったことは、次の通りである。(吉永和加「記号の形而上学と否定神学：デリダにおける虚構としての言説」、岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第52集)

デリダによれば、言語記号において、指標作用と表現とは根源的な仕方で絡み合っており、記号は形式的同一性として、反復可能性と差延作用を含む絶対的イデア性である限りで、記号たりうる。そのイデア性が、あらゆる記号一般の虚構的使用と実際的な使用との区別を動揺させ、対象の不在、主体の不在を許容するものとなる。

言語の差延の現場では、固有名は、常に消失しながら、不可能なものを目指すという仕方で戯れている。その戯れにおける、名や言表、起源の移動は、際限なく深淵化し、神学的言説と哲学的言説(ロゴス)の絡み合いのカオス、すなわち「コーラ」へと至る。「コーラ」は、「永遠に不可知な秘密なき秘密」であり、この秘密の存在に関しては、<sup>アポファティック</sup>否定的な実践しかありえない。それ

は、啓示宗教の秘密が伝授するものでも、否定神学の〈知ある無知〉の範疇にも入らないが、逆にそうした秘教的な教理を可能にするものである。

否定神学の言表は、否定形(アポファーズ)を取り、開かれると同時に閉ざされる、機械的な形式である。それは、意味作用を欠いた機械的な文の反復となりうるが、それゆえにこそ、偶像破壊を伴う虚構でありえ、言語表現の諸限界そのものを試練にかけ続ける一つの言語表現でありうる。その虚構は、「あたかも……であるかのように」という形式において、幾つものアポリアを通過し、記号の形而上学をもその虚構性を動揺させ続けるのである。

(2) デリダは、否定神学的叙述において、他者を語ることの可能性を開いた。だが、レヴィナスは、デリダと同様、他者を神と近似のものに描出し、デリダからは否定神学的と指摘されながらも、それを否定する。そこで、両者の言語論を比較して否定神学をめぐる立場の相違の原因を探りつつ、他者論の形而上学化は忌避しうるのかどうか、他者を語るべき境位を検討した。(吉永和加「他者論の形而上学化と否定神学：レヴィナスとデリダのあいだ」、岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第53集)

レヴィナスは、言語において二つの意味作用を見出す。すなわち、存在論に取り込まれ、現前と同一視される意味作用と、絶対的な差異を擁して、存在とは別の境位にあって無限を志向する意味作用である。後者は、「同一性」を攪乱する、絶えざる前言撤回において、「他なるもの」を存在とは異なる仕方で了解することを可能にする。

レヴィナスは、デリダの言語論について、記号のイデア性が対話を同一性へと帰着させ、他方では言語の戯れが意味の危機をもたらす、として批判する。その上で、彼は、「無限」を包摂しないまま、記号を通して記号を贈与し、自らを開示する「無限の証言」を「意味」の起源とし、さらには他者への有責性を告げる召喚への応答とし、「善」への道を開く。

レヴィナスによるデリダ批判にも拘わらず、両者の議論は主要な点で重なり合う。すなわち、反復される「前言撤回」と「言説の戯れ」、それを支える「善」と「イデア性」、さらに、その末に望まれる「来るべき世界 = ユートピア」と「来るべき民主主義」である。

両者の相違は、否定神学の是非に持ち越される。だが、レヴィナスが否定神学を拒絶して言説に求めた機能と、デリダが否定神学に求めた機能とは、根底で繋がっている。つまり、両者とも、思考が捕らわれている存在論や形而上学に言説の限界を認めたと、存在論的形式に留まらざるを得ない言説を誇張や比喩という形で借用する仕方、すなわち「あたかも・・・であるかのように」に至るからである。

そこで、最終的な両者の分岐点は、この「あたかも・・・であるかのように」が言説においてどのように作動するか、となる。レヴィナスの場合、倫理は「あたかも私と他人が共に死者であるかのように」して「世界とは別の場所」で果たされるものとして、完全に肯定された主体がそのすべての責任を負う。他方で、デリダの場合、「あたかも・・・であるかのように」が主体も外界も動揺させ、その運動は善や正義

を「通過するのみ」であり、したがって「来るべき民主主義」はカントの統制的理念以上の統制的理念に留まるのである。

(3) レヴィナス、デリダにおいて他者論は、他者が自己を神的なものに押し上げるか、イデア的なものを經由するかして、いわば宗教的、道徳的回帰を果たし、責任論へと帰着する。では、その責任論の形而上学的、あるいは宗教的な基盤とはいかなるものか。この問題を、リュシアン・ゴルドマンの「悲劇的世界観」という概念を用い、彼らの思想をパスカルと架橋することによって探究した。(Waka Yoshianga “ Le fondement religieux du traité sur l'autre: pour la philosophie du «comme si» ”, *Philosophia Osaka*, vol.9)

レヴィナスとデリダにおける超越と言語の検討によって、両者の決定的な相違が「言語の戯れ」と「否定神学的叙述」に対する態度に存することが明らかになった。その相違はさらに、レヴィナスにおいては、他性の無限の超越と、その無限に即応する主体の無限が肯定され、他方でデリダにおいては、言語のイデア的運動のみが是認されるがゆえに、他者も善も主体も凝固されえないという相違を生む。

とはいえ、両者は、前言撤回という仕方、あるいは言語の戯れという仕方、あるいは無限への接近を図る際、「あたかも・・・であるかのように」という構制を取ることで一致する。これは、ゴルドマンがパスカル解釈で指摘した「悲劇的世界観」という逆説的態度が、始原の不在の中で、絶対的価値の実現を求める道徳的要請が帰着した到達点と重なる。

ゴルドマンは、「悲劇的世界観」の概念によってパスカルとカントを結びつけたが、その結びつきはデリダへと延長されうる。デリダ自身がパスカルに言及した、正義についての論考がそのことを証示している。さらに、デリダがパスカルに見る、神秘的基礎の正当化の不可能と基礎付けの瞬間の非歴史性は、ゴルドマンの解釈に変更をもたらさう。

デリダは、神秘的基礎から脱構築の可能性を論じたが、これをパスカルに適用するならば、神秘的基礎の正当化不可能性は、「現象の理由」と「表徴」の議論へと繋がる。そこで「あたかも・・・であるかのように」は、パスカルにおける脱構築の重層性と歴史性を表わしている。そして、その形式的な虚構の構造が、パスカルの『パンセ』護教論の執筆を可能にし、護教論という形での他者の関係を構築しうるのである。

(4) これまでの研究を踏まえ、パスカルとカントに見出された「あたかも・・・であるかのように」の哲学をレヴィナス、デリダの倫理的態度へと敷衍させ、両者をその哲学のうちに位置付けた。その上で、今度はそのベクトルを逆向きにして、パスカル、カントの宗教的な布置を調べて、現代哲学の宗教的源泉を明らかにした。(Waka Yoshinaga “ La logique de l’énorme responsabilité: la philosophie du «comme si» et la question du mal ”, *Philosophia Osaka*, vol.10)

パスカルの『恩寵文書』の特徴は、「隠れたる神」の下での、恩寵絶対主義と厳格な予定説とである。そこで浮き彫りになる

のは、恩寵の絶対性にも拘わらず、人間の自由意志は堅持された結果、原罪がすべて人間の責めとされ、他方、恩寵の救いは不可視ゆえ人間は絶えず希望と恐怖に宙づりにされつつ義を行わねばならない、という理路である。この理路は、現代の他者論では、他性の絶対性と自己の絶対的受動性、そして不可能だが不可避な責任論と重なり合う。

カントは『哲学的弁神論の試みの失敗』において、人間に可能なのは、実践理性による認証的弁神論を構築し、理性の無能力を承認しつつ、偽りを行わない誠実さを問うことのみだとして、神性の役割を縮減し、道徳的主体としての人間を前面に押し出す。ただし、求められる誠実さが、主観的な信憑性としての「形式的良心性」を指す限りで、これは人間の側における、信仰の問題と道徳の問題の一致点となりうる。

それを受けて、カントが『単なる理性の限界内の宗教』で帰着する神の要請の論理構造は、ゴルドマンが指摘するように、パスカルの賭けの論理構造と重なる。しかしながら、両者で決定的に異なるのは、パスカルが、罪ある人間の回心の可能性を恩寵に賭けるのに対し、カントは、人間自身の道徳的性質に賭ける、という点である。その限りで、現代において人間の主体性に対する信仰が崩れると、パスカル的な「隠れたる神」の議論が、他者論や責任論とより密接に繋がることになるのである。

## 5 . 主な発表論文等

雑誌論文

- ・ 吉永和加 「記号の形而上学と否定神

学:デリダにおける虚構としての言述」,  
岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第 52  
集、査読有、2013 年、123 頁～139 頁。

- ・ 吉永和加 「他者論の形而上学化と否定  
神学：レヴィナスとデリダのあいだ」,  
岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編第 53  
集、査読有、2014 年、69 頁～89 頁。
- ・ Waka Yoshianga “ Le fondement  
religieux du traité sur l'autre pour la  
philosophie du «comme si» ” ,  
*Philosophia Osaka*, vol.9, 査読有 ,  
2014, p. 61 ~ p.79.
- ・ Waka Yoshinaga “ La logique de  
l'énorme responsabilité : la  
philosophie du «comme si» et la  
question du mal ”, *Philosophia Osaka*,  
vol.10, 査読有, 2015, p.1 ~ p.25.

学会発表

なし

図書

- ・ 吉永和加<sup>『</sup> <他者>の行方 記号と超越  
』(仮題)、ナカニシヤ出版、2016 年 3  
月、(頁数 400 頁)、として刊行予定。

産業財産権

なし

その他

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉永和加(YOSHINAGA, Waka)

岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授